

鈴木鎮一著「鈴木鎮一先生の指導用語事典—上達と下達」Suzuki Method 才能教育No. 180 頁 2012 を読む

## 鈴木鎮一先生の指導用語事典 上達と下達

### 1. (1) 上達する条件

- ① 毎日休まず練習する人。
- ② 重点的に正しい勉強の仕方をして、無駄弾きをしない人。
- ③ いい音を出す練習を毎日行なっている人。
- ④ 姿勢を注意して、正しく矯正することを忘れない人。
- ⑤ 勉強の時刻を毎日定めて練習している人、だんだん勉強時間を増してゆく人。
- ⑥ これまでに習った曲すべてを、より立派にする練習をする人。
- ⑦ 先を急がない人、立派な音になることを急ぐ人。
- ⑧ 習った曲がみな、いつまでも立派に弾ける人。
- ⑨ 立派な手本をさかんに聴く人。

### (2) 下達する条件

- ① 勉強をしない日のつづく人。
- ② 申し訳のような勉強をして、練習したつもりでいる人。
- ③ 落ち着きがなく、集中力がないままに、育てられてゆく人。
- ④ 勉強の時刻を決めないで、思い出した時にやっている人。
- ⑤ 習った曲を忘れてしまう人。
- ⑥ 現在習っている曲ばかりを勉強する人。
- ⑦ 習ってしまった曲を、済んだものと考えて、済んだ曲を立派に仕上げ音育てることを知らぬ人。
- ⑧ 曲を先へ先へと急ぐ人。
- ⑨ 立派な手本を聴かない人。
- ⑩ 親が先生の言われることを理解しようとせず、子どものために一生懸命にしていない場合。
- ⑪ 姿勢がいつまでも悪い人。
- ⑫ よい音を出す練習をしない人。
- ⑬ 音程を正しくしようとしない人。

2. ここでは、かつて鈴木鎮一先生がレッスンで使われた独特な表現や用語を取り上げ、その内容を先生の言葉とともにお伝えします。今回は、ヴァイオリン指導曲集第3巻の巻頭言にもある「上達と下達」について。日頃のレッスンを確認するヒントになりますから、しっかり勉強してください。

3. ①生徒 鈴木先生、よろしくお願いします。

鈴木先生 はい、今日は、国語の問題からスタートしましょう。「下達」と書いて、何と読むかね？

②生徒 先生、「かたつ」でしょうか。

鈴木先生 そう、上<sup>じょう</sup>達下<sup>かた</sup>達などで使われる読み方で、正解だね。でも、上達の反対ということでは、下<sup>げ</sup>達かね。

③生徒 (オモシロイナ！)

鈴木先生 前回、「下手<sup>へた</sup>になる練習をしないことが大切です」とお話ししたけれど、下手になることを先生は一言で下達と言います。

④生徒 先生、次から次に新しい曲を弾く練習が下手になる練習の一つだと教わりました。

鈴木先生 そう、他にもたくさん下手になる練習があるので、上に簡条書きにしてみました。

⑤生徒 (ウワッ、コンナニ！)

鈴木先生 どうかね？ 思い当たるところはないですか？立派な手本を聴かなかったり、思い出した時に練習を始めたり、習った曲を忘れていたりしないかね？

⑥生徒 先生、どうしても今習っている曲ばかり練習しがちで、復習がおろそかになっていました。

鈴木先生 先生は、特に親の皆さんにこの点については、声を大にして言いたいのです。子どもが上達しないと、親はすぐに「うちの子どもは能力がないから、なかなかうまくなりません」と言います。

⑦生徒 (ウチモソウダ！)

鈴木先生 それは、何が能力かを知らないから、子どもが悪いと逃げ口上を作っているだけなのです。このような時に、「毎日どれだけ練習をしたか、いかにおけいこをしたか、集中力がどれだけ育ってきたか」など、能力が育つ条件について、あれこれと考える必要があります。

⑧生徒 先生、それが○で示されている「上達する条件」ですか？

鈴木先生 その通り。上達する人は、必ずこうした条件に当てはまる人だということを、先生は永年のレッスンで経験してきました。これらを守っている人は、必ず上達します。能力は育てるものであり、よくよくその成長過程を追求することが大切です。周囲の環境、教育の優劣が、上達するか、下達するかの分かれ道となると言ってもいいでしょう。

⑨生徒 先生、やはり上達する人の方がいいですね。

鈴木先生 そう。能力は、いつも努力の後から育つものです。このことを忘れてはいけません。

P54 ~ 55

[コメント]

私の尊敬する鈴木鎮一先生の「バイオリン、指導用語事典—上達と下達—」1つ1つの「上達」「下達」する条件を読ませていただくと、バイオリンだけではなく、すべての勉強の基礎・基本がよくわかる。1つずつ自分のものにしていきたい。ありがたい文章だ。

— 2014年2月10日 林 明夫記 —